

# 『源氏物語』 「時めく」 考

——特殊表現として——

吉 海 直 人

【キーワード】 時めく・時めかす・めざまし・桐壺更衣

—

『源氏物語』の冒頭は、

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける  
中に、いとやむことなき際にはあらぬが、すぐれて時めき

たまふありけり。

(新編全集17頁)

と始まっている。今回ここで注目したいのは、「時めく」という語である。「時めく」の意味としては、新編全集の頭注五に「この時めくは、帝の寵愛を一身にあつめて栄える意」とコメントされている。参考までに小学館の『古語大辞典』で「時め

く」を調べてみると、

①時勢に合つて栄える。今を全盛としてはぶりがよい。

②寵愛されてはぶりがよい。

と記されていた。意味が二つに分かれているのは、①が本人自身が権力・勢力を有している(能動態)のに対して、②は帝などからの寵愛を受けて後宮の女性などが栄える例(受動態)だからであろう。桐壺更衣の場合は、当然②ということになる。

ここで私が拘っているのは、原義的に権勢を得るとか時流に乗って栄える意味の「時めく」が、弘徽殿女御ではなく桐壺更衣に用いられている点である(その後入内した藤壺にも用いられていない)。か弱い女性とされている桐壺更衣に冠された「時めく」を、読者はどのように理解すればいいのだろうか。

そこで従来の見解を調べてみたところ、桐壺更衣の悲劇性と権力が矛盾しないように、精神面・愛情面のみ「時めく」が強調されていた。その代表例として北山谿太氏があげられる。北山氏は、

時を得・時を得て用ひらる・寵愛せらるなどの意。羽振がよいとか、勢力があるとか訳するのは不可。事実からいっても、桐壺の更衣は、勢力をふるふどころではなかったのである。寵愛することは、時めかすといふ。

(『源氏物語の新研究桐壺編』武蔵野書院・昭和31年5月)

と、わざわざ「羽振がよいとか、勢力があるとか訳するのは不可」と論じておられる。これが現在まで継承されているのである。最新の三省堂全訳読解古語辞典でも、「時めく」ものもの栄えなかつた桐壺更衣」という見出しをあげて、

寵愛を受けることで、はぶりがよく栄える場合が多いが、常にそうとは限らない。②の用例は桐壺更衣の場合で、桐壺帝の愛情を一身に集めている意だが、それによつて桐壺更衣が大きな勢力を誇つて栄えていたわけではなかつた。

と、桐壺更衣の用例が例外であることを強調している。普通、辞書の説明では例外までコメントすることはないのだが、あえ

て桐壺更衣の例をあげているのは、それだけ桐壺更衣の存在が大きいからであろう。

ここまできると、二つの道が見えてくる。一つは従来の説を踏まえて、桐壺更衣の「時めく」が特殊用法であることを前提とすることである。もう一つは従来の説に疑義を唱えて、桐壺更衣の「時めく」をあえて原義的な意味で読み直してみることである。はたして桐壺更衣の「時めく」は、本当に精神面のみの意味に限定されるのだろうか。そう考えた時、ひよつとする」と読者は、先入観(幻想)で誤読している(させられている)のではないかという不安がよぎる。むしろ素直に桐壺更衣は時めいていて、後宮でそれなりの権勢を誇っていたと読むことはできないのだろうか(新編全集の頭注はそう解釈している?)。かつて私はそういった桐壺更衣への先入観(誤謬)を暴くべく、政治的で「したたか」な側面を有する人物として考察したことがある。そこでは、

更衣は自らの最大の欠点であるかよわさを、むしろ女の最大の武器として、帝の寵愛を勝ち取っている。それは決して他律的に自然に帝の寵愛を受けたというのではなく、更衣自らの積極的な働きかけを通して勝ち取ったものであつ

た。はかなさ・かよわさは男の同情（救助願望）を買う魅力たりうるのだ。そのため、ただただ帝の愛にすがる女性として描かれているけれども、桐壺更衣の後宮における生は、案外たくましいものではなかったろうか。少なくともどんなに追い詰められても、決して宮仕えを放棄してはおらず、むしろ堂々と誇りをもって、「まじらひ」続けているのではないか。

云々と論じた。その際、迂闊にも「時めく」については言及していなかった、というよりも思い至らなかったのである。そこで反省の意味も含めて改めて「時めく」に注目してみた次第である。

確かに桐壺更衣の場合、「時めく」は必ずしもプラスに働いておらず、むしろ分不相応に寵愛を受けることが、その後の物語展開（秩序の回復へ向けて）の伏線ともなっているように読める。今まで看過されていた冒頭の「時めく」は、案外重要な言葉（複線）だったのではないだろうか。

## 二

「時めく」に関連して、北山氏は「寵愛することは、時めか

すといふ」と、「時めかす」という語に言及されていた。要するに他動詞の「時めかす」と自動詞の「時めく」があり、それが相互に機能しているわけである。実は桐壺更衣にはその「時めかす」も用いられていた。ずっと後になるが、明石入道が桐壺更衣のことを、

故母御息所は、おのがをぢにもしたまひし按察大納言の御むすめなり。いと警策かうさくなる名をとりて、宮仕えに出だしたまへりしに、国王すぐれて時めかしたまふこと並びなかりけるほどに、人のそねみ重くて亡せたまひにしかど、この君とまりたまへるとめでたしかし。（須磨巻21頁）

と回想している。この場合国王（桐壺帝）が更衣を「時めかす」ことで、更衣は「時めく」ことになる。たとえそれによって「人のそねみ」を買おうとも。

そこで「時めかす」を含めて、『源氏物語』における「時めく」関係の用例を調査してみたところ、全用例は二十六例であった。それを用語・巻毎に分類すると、以下のようになる。

「時めく」七例 — 桐壺・賢木・滯標・若菜上・若菜

下・紅梅・竹河

「時めかす」四例 — 夕顔・葵・須磨・蜻蛉

「時めき」——ナシ

「心時めき」五例——朝顔・藤裏葉・匂宮・椎本・宿木

「御心時めき」二例——螢・紅梅

「心時めきす」八例——賢木・真木柱・藤裏葉・若菜上・総

角・宿木・東屋・手習

これを大きく分けると、「時めく」系が十一例で、「心時めき」系が十五例となる。また「時めく」系は北山氏が触れておられたように、寵愛する側の「時めかす」と寵愛される側の「時めく」に二分される。用例を見渡したところ、特に目立った偏りは認められない。

このうち用例数の多い「心時めき」については、小学館古語大辞典に、

何かを期待したり、予想したりするときに、胸の鼓動が早くなるような状態をいう。しかし類似語の「胸つぶる」と異なり、この語の方は悪い事態の予想には用いられないようである。

とある。『枕草子』に「心ときめきするもの」という章段があることでもわかるように、使い勝手のよい言葉であり、しかも「胸つぶる」と比較することができそうなので、それなりの重

要性も認められる。<sup>(2)</sup>ただし本論の考察からは除外することにした。

対象となる桐壺更衣以外の「時めく」は、以下の九例である。

1 かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ。  
(夕顔巻164頁)

2 故宮のいとやむごとなく思し時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすながいとほしきこと。  
(葵巻18頁)

3 やむごとなくもてなして、人柄もいとよくおはすれば、あまた参り集まりたまふ中にもすぐれて時めきたまふ。  
(賢木巻101頁)

4 春宮の御母女御のみぞ、とりたてて時めきたまふこともなく、尚侍の君の御おぼえにおし消たれたまへりしを、  
(滯標巻300頁)

5 されど、人よりはまさりて時めきたまひしに、みないどもかほしたまひしほど、御仲らひどもえうるはしからざりしかば、  
(若菜上巻20頁)

6 あやしくにはかなる猫のときめくかな。かやうなるもの見入れたまはぬ御心に。  
(若菜下巻158頁)

7いと時めきたまふよし人々聞こゆ。かかる御まじらひの馴れたまはぬほどに、はかばかしき御後見なくてはいかごとて、北の方そひてさぶらひたまふ。  
(紅梅卷42頁)

8はなやかに時めきたまふ。ただ人だちて心安くもてなしたまへるさましもぞ、げにあらまほしうめでたかりける。

(竹河卷91頁)

9それに、さるべきにて、時めかし思さんをば、人の譏るべきことかは、ただ人は、はた、あやしき女、世に古りにたるなど、  
(蜻蛉卷24頁)

これらの用例について、話者ではなく誰が誰に対して「時めく」「時めかす」を用いているかを示してみると、次のようになつた。

- |             |              |
|-------------|--------------|
| 1 源氏 ↓夕顔    | 2 故前坊 ↓六条御息所 |
| 3 朱雀院 ↓朧月夜  | 4 朱雀院 ↓東宮女御  |
| 5 朱雀院 ↓藤壺女御 | 6 柏木 ↓唐猫     |
| 7 東宮 ↓大納言大君 | 8 冷泉院 ↓玉鬘大君  |
| 9 帝 ↓受領の女   |              |

桐壺卷(桐壺帝 ↓桐壺更衣)を含めて、対象(主語)になつているのはほぼ天皇・東宮・上皇であり、「時めかされる」の

は後宮の女性である。そのため敬語の「給ふ」が付いている。「時めかす」主体としては朱雀院の三例(3・4・5)が一番多い。例外は1の源氏と6の柏木である。特に柏木の例は女三の宮の唐猫を寵愛したというケースであるが、猫が擬人化されることで大げさな比喻表現になつている。これも例外とすべきであろうか。なお『枕草子』にも「譲り葉」を擬人化して、  
なべての月には、見えぬものの、師走のつごもりのみ、時めきて、  
(94頁)  
とある。こういった例は寵愛や権勢とは無縁の比喻的用法であるろう。

以上の用例で押さえておきたいのは、6の猫以外すべて対象が女性に向けられている点である(猫も女三宮の分身とすればめす猫?)。どうやら『源氏物語』は、「時めく」を後宮の女性に限定して用いているようである。また朱雀院の例が顕著なように、一人だけが「時めく」わけではなく、複数の女性に使用されていることにも留意したい。<sup>(3)</sup>

ただしその度合いは違つており、朧月夜は「すぐれて時めきたまふ」、東宮女御は「時めきたまふこともなく」(打消し)、藤壺女御は「人よりはまさりて時めきたまひし」となっている。

そういえば桐壺更衣の例は二例とも「すぐれて」とあった。こ  
うなるとただ「時めく」だけでは寵愛の度合いは低いことにな  
る。

では『源氏物語』以外の用法はどうなっているであろうか。

## 三

参考までに『源氏物語』以外の用例を確認しておきたい。ま  
ず『古典対照語い表』（笠間書院）を見ると、

「時めかす」四例 大鏡<sup>4</sup><sub>4</sub>

「時めく」八例 蜻蛉<sup>1</sup> 枕草子<sup>3</sup> 大鏡<sup>4</sup>

「時めかしおぼす」一例 大鏡<sup>1</sup>

「心時めき」九例 枕草子<sup>8</sup> 徒然草<sup>1</sup>

とあった。前述のように『枕草子』の「心ときめき」の用例が  
突出していることがわかる。また『大鏡』の用例数も全体的に  
多いといえそうだ。

これだけでは材料が不足しているので、ここに漏れている作  
品の用例を調べてみたところ、次のようになった。

うつほ物語 時めかす<sup>4</sup> 時めく<sup>8</sup> 心時めき<sup>4</sup>  
落窪物語 時めかす<sup>1</sup> 時めく<sup>1</sup><sup>5</sup>

住吉物語 時めく<sup>2</sup>

栄花物語 時めかす<sup>6</sup> 時めく<sup>2</sup>

夜の寝覚 時めかす<sup>1</sup> 心時めき<sup>6</sup>

浜松中納言物語 時めかす<sup>1</sup> 時めく<sup>4</sup> 心時めき<sup>3</sup>

狭衣物語 時めく<sup>3</sup> 心時めき<sup>5</sup>

とりかへばや物語 時めく<sup>1</sup> 心時めき<sup>3</sup>

松浦宮物語 時めかす<sup>1</sup> 時めく<sup>1</sup>

無名草子 時めかす<sup>2</sup>

これを見ると、「時めく」は上代の文献に用例がないことが  
わかった。『竹取物語』や『伊勢物語』にもないが、取りあえず  
は中古語としておきたい。初出は『うつほ物語』ということに  
なる。しかも最初から『源氏物語』を上回る用例が用いられて  
いる。こうしてみると、比較的多くの作品に用いられている言  
葉であることになる（用例数も必ずしも少ないわけではない）。  
早速『うつほ物語』の十二例（「心時めき」を除く）を調べ  
てみたところ、以下のようになった。

1帝は時めかしたまふこと限りなし。（忠こそ巻209頁）

2女御たちをも見ならして、帝限りなくときめかしたま給ふ。

（忠こそ巻218頁）

3 かくあやしき人の、いかで時めき給ふらむ。

(忠こそ巻230頁)

4 いとかしこく時めきて、ただ今の殿上人の中に、仲頼、行  
政、仲澄にまさる人はなし。

(嵯峨の院355頁)

5 仲頼らがけしからぬ者に、よき女いと多くつきてなむ時め  
かすめる。

(吹上上巻395頁)

6 時めくことは藤中将と等し。

(吹上下巻538頁)

7 東宮の学士になされなどして、時めくこと二つなし。

(菊の宴巻43頁)

8 かくて時めきたまふこと限りなし。

(あて宮巻154頁)

9 帝のいみじく時めかしたまひて、この頃も、とく参りたま  
ひねとのみこそは、度々ある御文を見ればあめれ。

(蔵開上巻374頁)

10 上に限りなく時めかされたてまつりたり。

(蔵開上巻434頁)

11 あぢきなの歎きや。時めく人はさこそは。

(蔵開下巻580頁)

12 二つなく時めきて、子をただ生みに生めば、

(国譲下巻252頁)

これを誰が誰に対して用いているかで示すと、以下のように  
なる。

1 帝 ↓ 橘千蔭

3 帝 ↓ 忠こそ

5 妻達 ↓ 仲頼

7 帝 ↓ 藤英

9 帝 ↓ 御息所

11 東宮 ↓ あて宮

12 東宮 ↓ あて宮

『源氏物語』同様、『うつほ物語』も帝や東宮が時めかす側になっ

ている。ただし時めかされるのは前半が男性官人となつて

遜・自嘲を含めて語っていることなので、例外としてよさそう

である。後半になると、後宮の女性を寵愛している例に変化し

ている。特に用例8・11・12は東宮があて宮を寵愛している例

である。

『うつほ物語』の用例は、基本的に辞書の説明に一致してい

るといえる。ただし4や6のように、複数の男性が同時に寵愛

されている点には留意したい。6など涼が仲忠と等しく寵愛さ

れているとあり、序列なしに二人同時に同じくらい寵愛されて

いることになる(ただし男色ではない)。その意味では、「時め

く」は絶対的な重みを有しておらず、案外軽く用いられている

ことになる。そのため「限りなく」(四回)「いとかしこく」  
 「いみじく」「二つなく」(二回)といった程度をあらわす修飾  
 語を伴って用いられることが多い。

女性の例を見ると、9は詳細不明だが、あて宮に三例も集中  
 している点に注目したい。ただしあて宮はもともと高貴な身分  
 であり、寵愛されて当然の人だから、桐壺更衣のような物語展  
 開は認められない。むしろあて宮のような例が普通であつて、  
 桐壺更衣の方が特殊なのではないだろうか。

次に継子譚の『住吉物語』と『落窪物語』の「時めく」を見  
 ておこう。『住吉物語』には『源氏物語』のような後宮描写は  
 ないものの、二人妻の優劣ということと物語の冒頭に、

今は昔、中納言にて左衛門の督かけたる人、上二人となん、  
 かけて通ひたまひける。一人はときめく諸大夫の御娘なり。  
 姫君二人おはしけり。中の君、三の君とぞ申しける。いま  
 一人はもんぎの帝の御娘にて、なべてならぬ人にておはし  
 ける。(17頁)

と「時めく」が用いられている。これなど諸大夫であるから、  
 帝が直接寵愛する意味ではあるまい。むしろ経済的に豊かな成  
 り上がり者という意味で考えたい。もう一例、男主人公(中

将)のことが、

世にときめきめでたき人なれば、いかがせん、(104頁)  
 とされている。<sup>(6)</sup>これも合わせて『住吉物語』では、二例とも男  
 性に用いられていることに留意したい。「うつほ物語」同様、  
 これが普通の用法ではないだろうか。

また『落窪物語』にも、

左大将殿の左近の少将とか。かたちはいときよげにおはす  
 るうちに、ただ今なり出でたまひなむと人々褒む。帝も時  
 めかしおほす。御妻はなし。(巻一89頁)

とある。これは男主人公(少将)の例である。ただし『落窪物  
 語』にはもう一例、

御妹、限りなく時めきたまひて持たまへり。(176頁)  
 と出ている。これは中将(少将から昇進)の妹女御が帝の寵愛  
 を受けているという例である。それが兄の中将の権勢を支えて  
 いるわけだが、あて宮同様後宮女性の例として押さえておきた  
 い。

以上、『源氏物語』以前の用例を見てきた。その結果「うつ  
 ほ物語」以下、男性を対象とする「時めく」が多いことがわ  
 かった。それに対して『源氏物語』では、ほぼ女性ということ



で用法が偏っていることになる。また『うつほ物語』のあて宮など、本来身分の高い女性に用いられており、その方が普通の用法と思われる。身分の低い桐壺更衣に用いられる『源氏物語』は、それが不安材料というか、いまわしい事件の予兆となっているのではないだろうか。その意味で桐壺更衣の「時めく」は、特殊用法といえそうである。

#### 四

ここでもう一度最初の疑問に戻ってみたい。本来の「時めく」は、時勢にあつてはぶりがよい意味であつた。ではそういう人が、誰かにいやがらせを受けるだろうか。「時めく」は案外ちっぽけなはぶりのよさなのかもしれないが、それにしても桐壺更衣は「すぐれて時め」いたのであるから、帝の寵愛を得てはぶりがよかつたはずである。むしろいやがらせでもしようものなら、逆にひどい目にあわされるのではないだろうか。だからこそ、

はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。

(桐壺巻17頁)

と、後宮の女御達から憎まれたのであろう。考えてみれば「上

局」を賜つたのも、誕生した光源氏が東宮候補となるのも、更衣が「時め」いていたからではないだろうか。

これに類する例として、夕顔怪死事件があげられる。

かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ。

(夕顔巻164頁)

この話者を六条御息所の生霊と見れば、まさしく桐壺巻の弘徽殿と桐壺更衣の焼き直しということになる。桐壺更衣は身分不相応に帝の寵愛を独占したからこそ、弘徽殿をはじめとする後宮の女御達から「めざまし」と思われ、いやがらせを受けた。夕顔も光源氏から寵愛されたことで、面識もない六条御息所の恨みを買ひ、物の怪に取り殺される結果を招いている。

ここでは「めざまし」が使われていることに注目してみたい。というのも「めざまし」は、上から目線で用いられることが多い語だからである(差別語)。寵愛をうけた身分の低い女性に對して、身分高き女性が「めざまし」と思うことから事件が展開する(死に至る)。これこそ『源氏物語』における特殊用法であらう。

ついでに『源氏物語』以後の作品で、「時めく」と「めざまし」が同時に用いられている例を探したところ、『大鏡』師尹

伝に、

かぎりなくときめきたまふに、冷泉院の御母后うせたまひてこそ、なかなかよなくおぼえ劣りたまへりとは聞こえたまひしか。「故宮の、いみじうめざましく、やすからぬものに思したりしかば、思ひ出づるに、いとほしく、悔しきなり」とぞ仰せられける。(119頁)

とあった。これは村上天皇が芳子女御を寵愛した例である。芳子にはこれ以外にも、

御目のしり少しさがりたまへるが、いとどらうたくおはするを、帝、いとかしこくとときめかされたまひて、かく仰せられけるとか。

生きての世死にての後の後の世も羽をかはせる鳥とな  
りなむ  
(新編全集118頁)

と記されている。和歌の「羽をかはせる」には「長恨歌」の「比翼の鳥」が踏まえられており、その点も桐壺更衣の構図と類似している。

それに対して村上天皇の安子中宮は弘徽殿の立場にあり、中隔での壁に穴を開けて、のぞかせたまひけるに、女御の御かたち、いとうつくしくめでてあくおはしませければ、

「むべ、ときめくにこそありけれ」と御覽するに、(149頁)と芳子の美しさを見て、嫉妬のあまり土器の破片を投げつけている。この芳子には都合三度も「時めく」が用いられており、また弘徽殿役の安子に「めざまし」がられている点、歴史的にはこちらが『源氏物語』より先ではあるが、描写としては『大鏡』が桐壺巻を踏まえて書かれているといえそうである。それ程インパクトのあるものだったのだ。

次に『今鏡』「皇子たち第八腹々のみこ」には、

ことのほかにときめき給ひしかば、後の御方のめざましく思ひあひて、人の心をのみはたらかし、世人も、あまりまばゆきまで思へるなるべし。(講談社学術文庫下巻343頁)

と書かれていた。これは崇徳院が兵衛佐という女房を寵愛した記事であるが、后が「めざまし」と思っているだけでなく「人の心をのみ」「世人」「まばゆき」など、桐壺巻冒頭の表現が鏤められている。また身分低き女性の寵愛という点でも共通しているのもので、『今鏡』は『源氏物語』の描写を積極的に引用していることがわかる。

また『松浦宮物語』は氏忠(男性)の例であるが、中国において才能を發揮したことで、

すべて本の国の人、及びがたくのみあるにつけて、人はめざましう思ふかたもあれど、（中略）あはれに御覽ずれば、いみじう時めかさせたまふ。  
（32頁）

と、やはり「めざまし」と帝からの「時めかす」が同時に用いられている。これなど男性の例であるから内容面ではなく、単に桐壺巻の描写が表層的に引用されていることになる。

ついでに「めざまし」は共有していかないけれど、明らかに桐壺更衣を模倣しているものをあげておきたい。例えば『狭衣物語』の、

女御、御息所、あまたさぶらひたまへど、すぐれて時めきたまふもなし。  
（新編全集158頁）

は、一見して桐壺巻のパロディ（打消し）になっている。さらに「今まで後も立ちたまはぬなるべし」（同頁）ともあつて、後の不在という設定までも桐壺帝の後宮に類似させている。ただし桐壺更衣のように「時めきたまふ」女性が不在という設定の中で、嵯峨院の女一の宮が入内している。『狭衣物語』では桐壺更衣を飛び越えて、むしろ藤壺のパロディとなっていることになる。

次に『今鏡』の「すべらぎの下第三男山」はどうだろうか。

『源氏物語』「時めく」考

しのびて参り給へる御方おはしまして、やや朝政もおこたらせ給ふさまにて、夜がれさせ給ふ事なかるべし。いとやむごとなききはあらねど、中納言にて御親はおはしけるに、（中略）日に添へて類なき御志にて、ときめき給ふほど、ただならぬ事さへおはしければ、

（講談社学術文庫上巻412頁）

これは鳥羽院が美福門院得子を寵愛した記述である。「めざまし」はないものの、「いとやむごとなききはあらぬ」という表現のみならず、「朝政もおこたらせ給ふ」などが桐壺巻と共通している。また父の身分が低いこと、寵愛の結果として御子を出産することなど、明らかに桐壺更衣の引用であることが読みとれる。

## 結

以上、「時めく」に注目して総合的に用例を調査してみた。その結果、本来「時めく」は辞書的な用法で使用されていたが、『源氏物語』に至って使用範囲を後宮に限定し、しかも身分低き女性が寵愛されるという特殊な設定になっていることが明らかになった。だからこそ他の高貴な女性達の恨みを買ひ、その

結果死に至るといふ展開になっているのである。『源氏物語』の「時めく」は従来とは異なる特殊用法であり、悲劇的な展開の伏線（キーワード）となつていと読みたいたい。

ただしそれは必ずしも意味が特殊なのではなく、本来は「時めく」にふさわしい身分の女性に用いられていたものが、『源氏物語』に至つて身分不相応な桐壺更衣に用いられたことが最大のポイントであつた。中でも差別語「めざまし」を含むものは、それによつて上下関係の対立が明確になり、だからこそ秩序を回復する方向（死による退場）に展開しているのである。

その桐壺更衣の悲劇的な物語があまりにも強烈だったために、以後の「時めく」にも大きな影響を及ぼしている。物語展開の契機といった重要な用法ではないものの、桐壺巻からの引用であることがわかるような表現になつてゐる。それだけ桐壺巻の「時めく」は印象的だったのである。

## 〔注〕

(一) 吉海直人「桐壺更衣の政治性」『源氏物語の新考察』（おう

ふう）平成15年10月

(2) 「心ときめく」は現代では「時めく」として普通に使用されている。中世以降に「時めく」が衰退し、「心ときめく」が「時めく」として用いられるようになったのである。

(3) 『蜻蛉日記』の「御陵やなにやと聞くに、時めきたまへる人々いかにと、思ひやりきこゆるに、あはれなり。」(152頁)も村上天皇に寵愛された女性が複数になつてゐる。その一人である登子は、『大鏡』に「いみじうときめかさせたまひて、貞観殿の尚侍とぞ、申ししかし。」(162頁)とあり、「いみじう」が冠されている。

(4) 古典対照語い表では、「時めかす4」「時めく4」となつてゐるが、新編全集『大鏡』では「時めかす3」「時めく6」となつており、微妙に異なつてゐる。

(5) 旧大系の総索引によれば、「時めく」は2例あるが、新編全集ではそれが「時に」となつており、1例減少する。

(6) 新編全集とは別に、新大系では「なかなか、おほえすくなき宮仕よりも、時めかん上達部などに、あはせ給へかし」(316頁)となつてゐる。同じく男性の用例だが、用いられ方が異なつてゐる。